



TITLE:

ビスケーを[通]りて(渡歐日記第九信)

AUTHOR(S):

寺田, 貞次

CITATION:

寺田, 貞次. ビスケーを[通]りて(渡歐日記第九信). 地球 1925, 3(5): 539-543

ISSUE DATE:

1925-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182861>

RIGHT:

ビスケーを通りて

(渡歐日記第九信)

寺田貞次

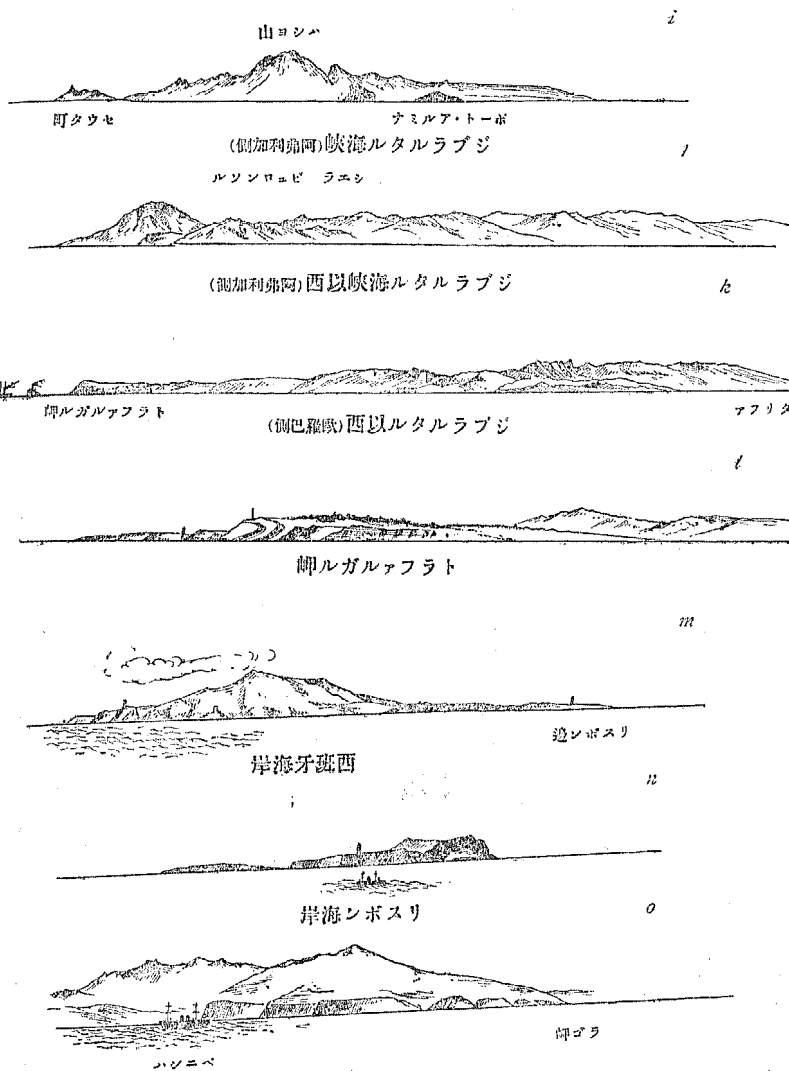
シブラルタルの巨岩が低い岬の尖端に屹立して居る、白布を乾して居る様な景色が見える、望遠鏡でうかがふとコンクリートで堅め岩石の崩潰を防で居るのである、船は三四哩の處を通過する、岩山の先端は所謂 *Eutopoint* である、之を過ぎると愈々海峡で兩岸の山脈を近く眺める、右岸は歐洲の先端で餘り高くない緩斜面の山の連続で、丘上迄もよく耕作されて居る、然し樹木なく一帯に赤褐色で寧ろ荒涼たるの感がある、之に反し阿弗利加側は高峰岩質の連山をなし、西方に向て低くなつて居る、少し隔て居るので判明はしないけれども連山緑色で中腹以下は褐色を呈して居る、モロッコの海岸で所謂アトラス山脈杯も此の續きであらう、阿弗利加の西北岸では此の山脈の爲に此の邊だけが開けて居るを聞て居るがなるほど歐洲の先端よりも有望に觀察され、氣候の原因は争はれないものと思つた、今迄極く静穏であつた内海も海峡にかゝる潮流の關係でもあらう段々波荒く白波高くなつて来る、一等運轉手鎌田氏は當船の航には此の邊から暗雲立ちこめて大荒になつたのであるが今日の模様では差したる事はないと云ふて居たが前途に有名なビスケーがある事だから心ひそかに懸かなるを得なかつた。*Fathia* 町の燈臺を近く眺めて進み一崎を廻る頃から風勢も少し加はり

ビスケーを通りて

白波、船體の動搖を感じて來た、やがてボルチュカルの海岸であらう、海岸何れも臺地をなし樹木もなく砂漠をなして居る場所が多い、シブラルタルの *Eutopoint* から約三時間の處は所謂ツラファルガーである、相變らず高臺性の海岸で一帯に砂漠をなし砂丘渦巻をなして見え、丘上には燈臺一個さみしく立て居る、別に異た景色でもないが有名な戦跡であるので趣味を以て眺める、三時頃から阿弗利加の連山と別れ、船は西北に航路を取る、潮流の區域も脱したと見え少し白波はおさまつたが、何分大西洋の事で紆曲が大きく船の動搖はまさることも少くはない、此の邊は地中海に入る關門、南阿、南米への諸航路の集合點に當るので船の往來は非常に多い、今迄の航海中に見ない多數の來往を觀た、一時は十數艘の姿を眺めた、殊に小さい船が高波に戰て居るのを見るに幾分心確な感がした、一睡ふと冷氣に眼をさますと、時將に十二時甲板に出て見ると右舷遙に燈臺の光を眺めた、定めしボルチュカルの西南端 *St. Vincent* 岬であらう、此處で船は急に航路を變へ北航をさるゝので北風船室を襲ひ俄に冷氣を感じたのであつた、之からは風勢も一層加はり動搖も大きくなり熟睡をさまたげられた。

十日、晴

天氣であるが船の動搖は相當にあり、ボルチュカルの海岸を沿ふて居るから、案内記に見るコロンブスの舊蹟 *Pago* 港なども通過したのであらうが洋々たる海上沿岸をみとめ得ない。暫くすると少し陸影を觀、燈臺が孤立して見える様になつて來た、ボルチュカルの海岸の中央に突出して居る *C. Razo* に近づいて來たのである、相變らず臺地の岩石質の海岸で樹木等



ある様に見えない、極くさみしい景色である、リスボン港は此の岬の陰の入込んだ處に在るを説明してくれた、汽船三艘に出會つた、氣温もだいに低くなり朝は六十五度下つて居た、之から暫くは陸岸近くを走るので沿岸の景色が段々明に見えてくる相當に高い山が聳えて見え、屹立した岩山の上に御寺の形が眼につく、有名な Penha 寺で一千五百九十五呎の高地に在るのだと説明してくれた、午後の二時頃 C. Carvoeiro と Burling 島との間を通る、此島は全く岩島で荒涼たる景色を呈して居る。

十一日、晴

天氣である、地中海で見た様な乾燥き爽快さは既にどこか去り何さなく濕潤な陰鬱な景色で右舷煙霧の間に餘り高くない陰影が見えて居る、波が段々高くなり動搖も段々甚しくなるので甲板に出る勇氣もなく引き籠る、定めしポルチュガル沿岸を過ぎて、西班牙の西北端 Finisiera 岬邊を通過て居るのであらう、愈々ビスケーも近づいて來たと思ふさよい氣持がしない、曇て居た晴雲はやがて去つたけれども波濤は益々高く動搖異様に烈しくなつて來た、愈々ビスケーにかゝつたのである、ビスケーの高波は今更でなく承知して來た、然し之れも冬季の事で夏季は差程でない、今度の航海は差程でなからうなぞ、聞て居たが不幸稍低氣壓を生じたので動搖を免れなんだ、此の灣は大西洋の大波が直接襲來するので高波の様子が他と異ふと申しますが誠に其の通りで流石の自分も頭が上らないう、船中で食物が取れないと云ふ程ではなかつたが、船窓に水平線の極端な上下を見、船窓のきしぐ音を聞いては心自ら快なるを得なかつた、然し此の難所は僅々一晝夜で明朝は海峡に入る

ビスケーを通りて

ると思ふて心なげまして居た。

十二日、曇

豫定ならば今朝は海峡に入るのであるが少々遅れた、空は晴れ日光は輝いて居るが東北風強く動搖も甚しいので尙起さる勇氣がない、昨日來の臥床に身體痛を覺え、苦痛を増して來た、一睡ふと眼をさますと時既に晝を過ぎ意外に靜かになつて居り、船窓のきしぐ音もしなくなつて居た、さては海峡に入たかと思ふ、シチュアートも來て勵ましてくれるので、勇を鼓して甲板に出る、空又曇つて東風尙強く動搖必ずしも少くはない、然し午前動搖とは異つて居るので氣分は甚しく不快でない、揭示を見るに船は北緯四十九度、經度五度二十一分の處を過ぎた許である、丁度佛蘭西ブリタニー半島の邊に相當する、將に海峡にかゝらんとする處である、此處迄來るさかうも動搖がかはるかと思ふとビスケーの高波は有名なものも流石と感ぜられた、無線が着して現内閣總辭職加藤内閣確立、英京では博覽會に際し電車汽車のストライキ起るとの報であつた、他の客も尙起て來ないし甲板に人なくさみしい上に一層のさみしさを感じたから再安臥する、夕頃には愈々海峡に入り動搖も大に靜になつて來たから食堂に出る、久振の感がした、今日は歐洲航路最終日なので船では鯛、スツボン等の御馳走を出して居る、同食卓はマルセイユ以來残りの邦人のみ一所になり船長を頭に三井氏夫妻、朝鮮總督府の關水、眞野、松本諸氏並に自分であつたが、ビスケーを通じて食堂を缺席しなかつたのは三井氏夫妻だけであつた、總督府の連中はマルセイユ出帆後腸胃をいため今夕も出席したのは眞野氏一人であつた、三井氏よりシヤ

ンペーの御馳走になり無事ビスクー通過を悦び、明日の菁英を祝した、愈々明日は午後四時頃着英するに船長の話に一同勇み立つた。

【十三日 曇】 八時起床甲板に出る、海峡も餘程進んで居る、乗客の英人は久振に故郷の景色を眺めて悦んで居る、冷氣一入と増し、外人は口々にコールドの挨拶をして居る、水島多く汽船の往來も多い、左舷に陸影が見えて居る、*Leith* 州の海岸で極く低い地勢を示して居る、昨日と引きかへ波靜かで氣壓ものぼつて居る、朝九時半頃愈々最狭い處を通過する。ドーバーの港(圖版第十版)は近く左に見えて居る、海岸は白色斷崖地でドーバー港は少しの灣入を利用したもので防波堤を築き小港ではあるが英佛唯一の渡船場として立派に設備されて居る、快晴なれば佛國側のカレー方面を眺め得るのであるが折悪しく濃霧で見える事が出来なかつた、のみならず折角豫期して居た英國の海岸も一向見えない、漸く兩岸を眺め得る様になつた時(晝前)は既にテームス河口をのぼつて居るのであつた、前に經驗した揚子の河口の大ばないけれども日本などでは到底見られぬ廣大なもので兩岸は揚子の沖積地の様に低平褐色ではないが、低い丘陵地をなし綠樹こんもりと茂つて、綠の草一面にし美しく地上をおほつて居る、歸國の外人は之を眺めグリーン(さ如何にもなつかし氣に眺め、其の美を誇つて居た、段々兩岸の人家も多くなり趣味深く眺める内に早くも停船した、未だロンドン市までも思へぬ田舎であるが此處が *Tidbury* と云ふ處で、船は之れから尙のぼつてヴァイクトリアアドックに入るのである、然か

し之には朝夕を利用するので時間を要するから乗客は皆此處で下りるのである、税關員が出張して來るから荷物を甲板に搬出して検査を受ける、煙草の有無を聞くだけで開封もせずに通過した、丁度在ロンドン日本郵船の伊藤運船君が迎に來てくれたので早速下船する、上陸地はチルブリー停車場で汽車の聯絡がある、約三十分乗車するにロンドン市のフエンチャーチ停車場に着する、此の間はロンドンの郊外地で何處の町も同様餘り美しくない、田園は綠草でおほはれて居るが耕作を見ない牧牛など處々に見受くるのみである、伊藤君の説明に依るに英國は土地が貧澤で何もつくらずに遊ばして居るに果して當を得て居るや否やは別として先づそんな感もする、樹木を見るに日本には見受けぬ樹ではあるが本邦でも北海道に多くある樹である、先年北海道の某氏が來英のせつ此邊を札幌近郊の琴似に比したと伊藤君が話して居たが誠に當を得た言で風物は確に北海道に類似して居る、ロンドン市の貧民窟が此處だぞ教へてくれる、汚ないのだそうなが始めての自分には十分にわからなかつた、段々家屋稠密になると思ふにフエンチャーチ驛であつた、ロンドン市の一驛で東京驛と云ふ様な大停車場ではないけれども流石に雑踏して居る、堀越商會の小濫和助君が迎へて居た、餘り久振の面會で反て挨拶も出來ず兩君の案内のまゝに或は自働車或は地下の電車(後に聞くにサチューンと云ふて居るもの)か瀛車か何が何やら知らずにハムステッドの下宿に着いた、荷物を置いて再兩氏の案内で今度はバスと云ふ所謂乗合自働車で出かける、二階を有する事で珍しからうと思ふてか二階に案内され

た、街路を見下しながら走るのは甚だ爽快である、然し意外の冷氣に餘儀なく階下に下りた、英國は緯度の上から觀るに我が國の九州よりも北に當るが暖流の御蔭で暖かいのだと云ふ事は聞て居るが今更ながら氣温の差がだいぶある事を直覺した、繁華の中心に出て夕食をする、繁華の中心と云ふのは後聞くまでカデリー邊であつたらしい、四月末日神戶を出立以來此處に四十有餘日、思へば随分永い航海を無事に終り始めて大陸の土を踏み、又多年出合はなかつた南君に接した悦は一寸想像が出来ない、猶下宿には偶然にも自分より約一ヶ月先に出られた京都帝國大學文科助教授植村清之助氏並に昨年末着英の東京大學文學部助教授今井氏が居られ兩氏共歴史家であるので自分に取つては何より愉快であり、翌日からは植村氏の厚意で大英博物館

(渡歐日記完結)

地理教材としての地形圖 (十)

甲山長津高原の南縁

主要地圖 五萬分一地形圖 赴戰嶺(洪原六號)
參照地圖及文書 朝鮮二十萬分一 洪原、五萬分一 新興(洪原七號)
立岩巖、咸鏡南道咸興地方の地質、朝鮮鑛業會議第八卷第一號(大正十四年三月)
小田内通敏、朝鮮の火田民、朝鮮部落調査報告第一冊(大正十三年三月)

地理教材としての地形圖

を始め市内を見物する。ロンドンには世界の大都市である、萬事に付て大規模な町である、ロンドンがどんな處であるか、如何なる方針で進む可きかは之れから二三日の見物では到底活す事は出来ない。

要するに歐洲航路は如何にも永い航路で旅客に取つてはつまらない航海である、然かし一方から觀るに此の航路は沿岸航海で寄航地が多いし、其の寄航地が舊大陸の東西に渡つて文化の異つた地方であり、殊に世界文化の發祥地をも見訪ふ事が出来るので有益な事は一通でない、此の方面に興味を有する自分等には一層の感想を興えた、西比利亞の道は今後回復すとも一度は通過しなければならぬのは此の航路であるを愉快に思つた。

朝鮮北部國境地方即ち咸北、咸南、平北に互る小藤博士の蓋馬山地と呼んだ山地は一帶に高原性を帯びて居るが殊に其の中部である咸南の^{ウツシ}甲山、豐山、長津、新興各郡地方は立派な高原性を現はして居て、この部分を特に甲山長津高